

## 論文要旨

### 慈善事業からみる民国期北京の社会——香山慈幼院を中心に

大江 平和

本稿は、慈善事業から社会事業へ移行する過渡期とされる 1920 年代中国の社会福祉のあり方の解明を目指すものである。具体的には、当該期に北京で慈善教育事業を行っていた香山慈幼院という孤児院を事例として分析する。

本稿を通して、新たに解明できた論点は次の通りである。

第一に、熊希齡の生涯と香山慈幼院の設立と展開についてである。香山慈幼院創設者の熊希齡という人物の特色として、①教育に対する強い関心、②熊希齡の広い人脈、③緻密な実務能力、④香山慈幼院を社会事業と位置づけた先駆性が挙げられる。このような特色をもつ熊希齡の個人的能力が当院における慈善事業から社会事業への転換を推し進めた。(第二章)

香山慈幼院は、伝統的な儒教にもとづく徳育を重視しつつ、近代的な教育手法を導入し、中国独自の教育実験を試みた。本稿では、香山慈幼院が、収養と生きるための技芸を身につけさせるという従来の慈善教育を行う学校から次第に新しい試みの教育実験学校へと変容したことを跡づけた。そして、熊希齡が国家による社会的な救済制度がまだ確立されていない民国期において、貧困の社会性を認識するという先駆的観点を持っていたこと、及び熊希齡という核となる人物の存在こそが、香山慈幼院が約 30 年存続し、多くの卒業生を輩出できた最大の要因であったことを指摘した。(第三章)

第二に、香山慈幼院を支えた財政の動向についてである。1919 年から 26 年上期までの財務状況は政府の補助金に支えられてきた。しかし、生徒数の急増と政局の変化に伴い、収支のバランスが崩れ、巨額の負債を抱えるに至った。1926 年から 27 年にかけて、当院の財務状況は、政府依存の構造から民間依存へと大きく転換を迫られた。寄付者については個人よりも機関や団体が圧倒的に多く、とくに各地の中国銀行が重要な募金ルートとなっていた。(第四章)

南京国民政府成立後の 1927 年から 37 年までの財政の動向をみると、1927 年 7 月から 12 月までの政府の未払金が最大であった。その背景には、この時期の不安定な政情とそれに伴う諸機関や人員の改編が挙げられる。香山慈幼院の存続を図るため、熊希齡は自らの人的ネットワークを最大限に駆使し、財源を引き出せる可能性のある要人や機関に書簡を出し、支援を懇願した。その内容には、孫文の建国大綱などを引きつつ、社会的政策を推進すべき政府の責任を強調する近代的な観点が見られるが、同時にそうした政府の援助を引き出そうとする彼の手法は、個人的な人脈と情誼に頼る伝統的なものであった。(第五章)

第三に、香山慈幼院をとりまく行政機関についてである。香山慈幼院をとりまく行政機関として市政府のもとに置かれた教育局と社会局があり、それぞれから管理・監督を受けてい

た。市教育局は1929年に設けられたがわずか4年で社会局に吸収合併され、その後は社会局による管理・監督に一本化される。社会局と香山慈幼院との往来文書の分析を通し、社会局の取り組みの重点は、保護や支援というよりはむしろ新しく公布された慈善関連法規に依拠し、繰り返し民間の慈善機構に圧力をかけ、管理・監督を強化することに置かれていた。(第六章、第七章)

終章では、次のように結論した。明清以来、政治、文化、教育の中心地であった北京は、民国期に入ると、軍閥割拠の状況が形成されるに伴い中央の権威は凋落し、国家権力は弱まった。南京に国民政府が樹立すると、北京の地位は低下し、経済状況も悪化した。このようななか、香山慈幼院と熊希齡をめぐる民国期北京の社会は、1910年代から30年代を通じて、失業や貧困、自然災害による人口流入などに加え、日本軍による圧迫等大きな社会不安を抱えていたため、人々の慈善事業への要請は大きかった。しかし、上海のような民間の活発な慈善活動によって形成される成熟した慈善のネットワークの土壌は北京では存在しなかった。それは主に北京という都市を特徴づける二つの要因、即ち、長らく王朝の権威を象徴する首都として官の力が優勢であったという政治的要因と、清末以降北京の経済が疲弊していったという経済的要因によるものであった。

本稿で検討した香山慈幼院の事例では、政府の資金に依存しつつも、個人的人脈によってその補助を調達するという、いわば社会事業と慈善事業との両面的な性格が見られた。これは、慈善事業から社会事業へという大きな趨勢における過渡的な特徴を示すものということもできる。ただ、政府の社会事業的活動と民間の慈善ネットワークによる活動とがともに比較的安定した基盤をもって活発に行われていた上海と比較すると、北京の状況は、政府財政の面からみても、民間資金の面からみても、より厳しいものであった。香山慈幼院の活動は、官界と民間をつなぐ熊希齡個人の人脈や努力に依存するという点で、基礎の不安定さを免れなかったといえる。しかし別の面からみれば、それにもかかわらず、先進的な教育理念を掲げ、多くの有為の人材を輩出したという点に、熊希齡という人物の存在の重要性を見て取ることもできる。